

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 5 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K10332

研究課題名(和文) 自閉症児に対する新しい療育RDI(対人関係発達指導法)の効果検証

研究課題名(英文) Verification of the Effectiveness of a Relationship Developmental Intervention (RDI) for Children with Autism Spectrum Disorder

研究代表者

岸本 真希子 (Kishimoto, Makiko)

岡山大学・医学部・客員研究員

研究者番号：10781148

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：ADOS-2にて自閉症と診断された8名の対象児において対人関係発達指導法(RDI)による介入が1年間継続され、対象児の適応行動尺度、情緒、行動上の問題、養育者(母親)の育児ストレス等について介入前後における変化の評価が行われた。Vineland-II適応行動尺度の適応行動総合点は有意に改善した($p=0.034$)。領域標準得点にて社会性($p=0.018$)に、下位領域では、対人関係($p=0.018$)の有意な改善を認めた。しかしながら、異常行動チェックリスト(ABC-J)、子どもの強さと困難さアンケート(SDQ)、育児ストレスインデックス(PSI)でいずれも有意な改善は認められなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

対人関係発達指導法(RDI)は、親子の関係調整をはかることにより、自閉スペクトラム症の子どもの中核的な障害の改善をはかるという画期的な療育方法であるが、これまでRDIが子どもの適応行動や行動上の課題へ与える効果に関する情報は極めて乏しかった。本研究で1年間のRDI介入による、自閉スペクトラム症の子どもの適応行動尺度の総スコアや社会性領域で有意な改善が報告され、RDIが有効な療育方法の一つである可能性が示された。一方で行動上の問題や養育者のストレスに関しては有意な改善は認められず、今後さらなる検証が必要であると考えられた。

研究成果の概要(英文)：Eight children diagnosed with autism on the ADOS-2 received a one-year intervention using the Relationship Developmental Intervention (RDI), and pre- and post-intervention changes were assessed on the child's adaptive behavior scale, emotional and behavioral problems, and caregiver's (mother) parenting stress. The Vineland-II Adaptive Behavior Scale showed significant improvement in the overall adaptive behavior score ($p=0.034$). Domain standardized scores showed significant improvement in Socialization Domain ($p=0.018$) and the sub-domain interpersonal relationships ($p=0.018$). However, no significant improvements were found for the Abnormal Behavior Checklist (ABC-J), the Child Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ), and the Parenting Stress Index (PSI).

研究分野：児童精神科

キーワード：自閉スペクトラム症 対人関係発達指導法 ヴァインランド適応行動尺度

1. 研究開始当初の背景

(1) 現在世界的な傾向と同様に、本邦でも自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder; 以下 ASD) 児の有病率の増加が指摘されており、ASD 児に対する医療支援の急速なニーズの高まりがある。ASD による生活の質の低下の最も大きな障壁は、社会的・感情的機能の障害であり、これらの中核障害は治療抵抗性であり、これらの ASD 特性から、発達過程の中で自己肯定感の低下や認知の歪みを来し、症状の難治化・長期化による社会適応の低下を来すことが指摘されている。また ASD 児を持つ家族はうつ病、不安障害の合併の多さが報告されており、家族に対するサポートや支援の導入により、これらが改善する可能性が高まることや、家族の楽観的な思考が ASD 児の良好な予後につながりやすいとの報告がある。ASD 児の予後改善や家族の QOL の改善のために、中核障害にアプローチする方法の開発や、家族への支援や介入が必要であると考えられる。

(2) 対人関係発達指導法 (Relationship Developmental Intervention; RDI) は対人相互的交流への意欲や経験共有の力を引き出すことに焦点を置き、経験共有の困難さといった ASD の中核障害に対してアプローチすることが特徴である。定型発達の子どもとその養育者の間では、養育者による丁寧且つ連続的に子どもに協調的に関わり誘導することによって、徐々に系統的な形において経験共有の力を発展させていく。RDI ではこれを心理発達の成長の要として「ガイド実習生の関係」(Guide relationship ; GPR) と呼び重要視している。定型的 GPR により親子間には感情的なフィードバックシステムや互いのシンクロニティが生後 2-3 ヶ月の中に完成し、これを土台として、変化する複雑な世界に柔軟に対応するダイナミック・インテリジェンス (DI: Dynamic Intelligence) を獲得していくと仮定されている。ASD 児は、感情的フィードバックを養育者に返さず、同時に養育者の感情表出を解釈できないため、GPR が機能しにくい。RDI では、単純な遊びや運動を通して親子間の関係調整を行い、情緒的やり取りを推進して、GPR が形成されていくのを助ける介入方法である。海外では Gutstein による RDI の有効性をサポートする研究報告 (2007) があるが、適応行動尺度や親のストレス度の評価に関する報告がなく、効果の検証が望まれる。

2. 研究の目的

RDI による 1 年間の介入による安全性の検討と、介入前後における ASD 児の知的能力、社会適応能力、問題行動、親のストレス度等の改善度、さらに社会性、友達関係、家族関係、相互的コミュニケーション等の自閉性症状の質や量の改善度の検討を行う。

3. 研究の方法

岡山大学精神科外来を受診する 4 歳以上 6 歳以下の、研究チームによって ASD と診断された児童とその家族で、対象児の保護者から同意が得られた患者とその保護者を対象に行う。研究チームの療育担当者により、RDI 独自の視点に基づいたアセスメントを行った後、計 1 年間、月に 1 回 RDI による療育支援の介入が行われる。親子間で協同的な活動を行う場面をビデオで撮影し、療育担当者が撮影されたビデオを観察し、親に対して適宜アドバイスを行うことによって介入が成され、この過程は外来診療場面の他、適宜家庭内やメール等の方法で行われる。療育開始前のベースラインと開始 1 年後に、臨床評価を全ての対象児に行い、療育開始前後で RDI による介入の効果の検討、安全性、実現性の評価を行う。

・研究の方法 (デザイン)

RDI による介入の安全性および有効性、有効性が検出できる期間を明らかにするための探索的臨床研究である。

・研究対象者の設定方針

研究開始時の年齢が 4 歳以上 6 歳以下である、研究チームによって ADOS - 2 (Autism Diagnostic Observation Scale Second version)、PARS-TR (Pervasive Developmental Disorders Autism Society Rating Scale- Text Revision)、DSM-5 を用いて診断が確定される。RDI による療育を受けたことがなく、対象患者の代諾者が、本研究の参加にあたり十分な説明を受けた後、十分な理解の上、代諾者の自由意志により文書同意が得られた患者とする。明らかな身体障害、感覚障害、運動障害、遺伝疾患、頭部外傷、器質性脳疾患、神経疾患の既往、てんかんの既往がある児童は除外する。目標症例数は 10 例である。

・介入の内容

養育者と ASD 児のペアで遊びや家事等での活動を撮影する。療育担当者は ASD 児の対人交流へのモチベーションや養育者のガイド力を評価する。

療育担当者は RDI の評価をもとに、養育者に対して関わり方の指導を行う。その際、療育担当者は ASD 児と RDI 活動を共に行い、モデルを示す。養育者は児を対人交流に従事しやすくする環境設定の仕方、児の最近接領域へのアプローチ法、情報処理が可能となるペースダウンした関わり方、養育者がリーダーシップを取るなどについて指導を受け、実践する。

以後同様に 1 ヶ月毎に家庭内や外来場面で、養育者と ASD 児のペアで RDI 活動が行われる。療育担当者から養育者へのアドバイスや、ビデオの振り返りを行い、GPR の設立に向けて継続的に取り組んでいく。

4. 研究成果

ADOS-2にて自閉症と診断された8名の対象児において、対人関係発達指導演法(RDI)による介入を1年間実施し、対象児の適応行動尺度、情緒、行動上の問題、養育者(母親)の育児ストレスや心理的ストレスなどについて評価を行い、介入前と介入1年後の改善度に関して解析を行った。主要評価尺度であるVineland-II適応行動尺度の適応行動総合点は有意に改善した(介入前:70.25±10.51 vs 介入後:79.62±16.19、 $p=0.034$)。領域標準得点では、コミュニケーション($p=0.034$)と日常生活スキル($p=0.208$)に有意な改善は認められなかったが、社会性(介入前:56.62±14.26 vs 介入後:72.50±21.06、 $p=0.018$)に有意な改善が認められた。さらに下位領域の中では、対人関係(介入前:9.12±2.16 vs 介入後:11.12±1.80、 $p=0.018$)が有意に改善し、その他読み書き($p=0.068$)、遊びと余暇($p=0.063$)、コーピングスキル($p=0.059$)に改善の傾向を認めた。適応行動総合点の改善率、社会性の領域標準得点の改善率は、いずれも年齢とは相関が認められなかった。ADOS-2による比較得点との相関では、自閉症の重症度が低いほど、社会性の領域標準得点の改善率が高い傾向を認めた。知的発達水準の評価は、5例においてウェクスラー式知能発達検査による介入前後の比較が行われた。個人によるばらつきが大きかったが、介入前後で改善を認めた(改善率:平均13.0%、中央値:17.20%)。異常行動チェックリスト日本語版(ABC-J)の5つの下位尺度、子どもの強さと困難さアンケート(SDQ)における総合的困難さと5つの下位尺度のいずれにおいても介入前後で有意な改善は認められなかった。また育児ストレスに関する評価尺度である育児ストレスインデックス(PSI)では、親自身に関わるストレス項目や、子どもの特徴に関わるストレス項目のいずれにおいても有意な改善は認められなかった。さらに養育者(母親)心理的ストレス反応の尺度である心理的ストレス反応測定尺度(SRS-18)の3つの下位尺度において、いずれも介入前後で有意な改善は認められなかった。

本研究にてRDIによる介入で、初めて適応行動尺度による評価が成され、総合尺度での改善や対人関係の形成を含めた社会性に関して改善が認められたことが、主要な成果としてあげられる。一方で、1年間の介入では行動上の問題や育児ストレスに関しては十分な効果が認められなかったため、これらの尺度に関しては、併用療法の検討や、長期的な視点による評価の必要性があることが研究結果より示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 岸本真希子、高木学、山田了士	4. 巻 16
2. 論文標題 RDI (Relationship Developmental Intervention) - 対人関係発達指導法による療育支援	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語聴覚研究	6. 最初と最後の頁 325-332
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 岸本真希子
2. 発表標題 RDI (対人関係発達指導法) を用いた療育支援
3. 学会等名 第20回日本言語聴覚学会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 岸本真希子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 科学評論社	5. 総ページ数 7
3. 書名 精神科	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	高木 学 (Takaki Manabu) (60452570)	岡山大学・医歯薬学域・教授 (15301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------